

3-6		主題	私達はあきらめない！～all for one～	
ターミナルケア		副題	看取り介護の実践から学ばせていただいたこと	
研究期間	12ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム さつき荘	
発表者：戸田 公明（とだ きみあき）		アドバイザー：橋本睦子（はしもと むつこ）		
共同研究者：町田 友紀（まちだ ゆき）				
電話	03-3703-0581	メール	k-toda@rougo-happy.or.jp	
FAX	03-3703-0583	URL	http://rougo-happy.or.jp	
今回発表の事業所やサービスの紹介	特別養護老人ホームさつき荘は、社会福祉法人老後を幸せにする会を母体として、昭和51年に開設されました。今年度から『私たちは、全ての高齢者が「ここに住みたい！」と思えるような新しいホームの形を作ります』という新ビジョンを掲げ、日常のケアから看取り介護まで幅広く、より個別性の高いサービスの提供を目指しています。			
<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>特養であるさつき荘では、その方の人生の最期の時に、納得して、安心して、穏やかに暮らしていただくことを目指しています。これは、我々の社会的な役割の一つであると認識しています。しかし、看取り介護に携わった職員は、多くのケースで「その方のために、もっと何かしてあげられたのではないか」という、後悔の念に近い感情を抱いています。ご家族と共に看取り介護を展開し、ベストを尽くして最後には感謝の言葉をいただいたとしても、その方の死を目の当たりにすると感じてしまう虚無感。この事が仕事に対する不安や負担感に繋がっていることは否定できません。</p> <p>「終の棲家」という使命を担う私達は、人の死をどのように考え、受け止めるべきなのでしょうか。これまで実践してきた看取りを検証し、特養における看取り介護のあり方と今後の課題について考察しました。</p>		<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>終末期において、その方の一生の締めくくりの時をどの様に過ごせたかが重要であると思えます。つまり、特別な状態ですので、ご家族と共に私たち援助者が「all for one」の精神で関わりをもつことが基本です。これをベースにして、その方に安らぎを感じていただけるような援助を展開できることを目標とします。</p> <p>これを実現するために、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①あきらめずに ②心を込めて ③その方やご家族が望む生活を創造する <p>といったキーワードを念頭において、それぞれのケースごとにチームでベストを尽くすことができる風土が形成できると良いと思えます。</p> <p>そして、「利用者の思い、ご家族の思い、援助者の思い」ができる限り同じベクトルに向かうことで、皆が納得して、安心して、穏やかな終末期を送ることができることを、さつき荘のサービスの強みとして確立したいと思っています。</p>		

《具体的な取り組みの内容》

・A様の看取り介護計画に基づいた、援助の展開。

①各セクション合同のカンファレンスで援助方針と具体的サービスの内容についてコンセンサスをとる。

②実践（出来る限り人の温もりを感じらるよう）

- ・職員出勤、退勤時の訪室で言葉かけ
- ・安楽な体位保持、ポジショニング
- ・体調・保清管理、緩和ケア
- ・A様のご家族チョイスの音楽をかける
- ・生き生きと生活されていた頃の写真を掲示
- ・アロマオイルを焚き、芳香を感じていただく
- ・セラピストの協力による、アロママッサージの施術など

③看取り介護を通して学んだこと

フロア会議で総括、成果と今後の課題を明確にする。

④グリーンケア

その他、実施した学習会など

○エンゼルメイクの内部研修を実施。葬儀社の方を招いて、死を迎えた方への向き合い方や死後処置の手技を学習した。

○家族会において「施設における看取り介護について」というテーマで、ご家族とディスカッションを行った。

《取り組みの結果と評価》

・A様の看取り介護の総括

①全体で合意した具体的援助を、ご家族とのチームで展開できた。A様は痰が絡んで呼吸苦の状態だが、穏やかな表情もよく見られた。

②セラピストによるアロママッサージの施術を依頼。癒しの音楽を耳で感じながら、胸部や背部を優しくマッサージすると、それまでの呼吸苦の状態が驚くほど改善された。傍で見守っていたご家族や職員も、奇跡的な印象を強くもった。これ以後はご家族（奥様）が毎日のように面会に來られ、セラピストから学んだマッサージを通してコミュニケーションをとられていた。

③夜間の痰絡みによる吸引（看護師不在の夜間に介護職が行う緊急時対応）では、多少の不安感があったが、看取りの指針が明確であったことや、施設で最期を迎えて欲しいというご家族の思いを職員間で共有できたので、各々があきらめない気持ちをもって最期まで援助することができた。

《まとめ》

今回の看取り介護で感じたことは、どのような状態であっても人は心で通じ合う可能性があるということです。「あきらめず、心を込めて、創造する」という視点を持ち続け、必要な知識と技術を学ぶ努力を惜しまない逞しさを全ての職員が持つことが、その方の人生の終末に相応しい援助を行える近道なのだろうと思いました。

《提案と発信》

超高齢社会や核家族化が進んだ現代では、施設での終末を望まれる方も少なくありません。これらの社会的な背景を踏まえて、施設サービスに求められていることは、「ここで最期を迎えたい」と思っただけのような場所であり続けることだと思います。そのために私たちは、「死をタブーにしない」という考え方をもって、利用者・ご家族との関係性を深めることから取り組みはじめています。

【メモ欄】追加資料 有 無